

雜詠日記

秋水泡語

谷川
修

序

「一年ばかり日記を中断していたが、一九八八年元旦を期して再開した。今年からは雑然とだが様々のことを多く記すように心がけている。永井荷風の日記に習って俳句のまねごとをしているうち、短歌なども出来てきたので、折々と浮かんだ詩情や心をよぎった言葉を拾い集めてみた。季語を知らぬ者が句を発し、歌論を読まぬ者が五七の言葉を連ね、韻の分からぬ者が漢字を並べるのである。それは、日常の生活に押し流されることへのささやかな抵抗でもある」、十七年前、こういう書き出しで前年の雑記を一つの冊子にした。パーソナル・コンピュータを使つてB5用紙に印刷してホチキスで綴じたささやかなものだ。それが習慣となつて追い追い小冊子が九冊になったとき、ひそかに「徐山猿声」篇と名づけて区切りをつけた。その後も少しはよいものでもできればと、篇名を「秋水泡語」と改めて続け、九年経つてまた九冊の小冊子ができた。これもまだ秘蔵して人に見せるほどのものでもないが、還暦の年であつた去年はいろいろのことがあり、そろそろ形見になるものを作つておこうと思ひ立つて九冊をまとめてみた。すべてを集めれば紙数が多くなりすぎるので、選り分けを行なつておよそ四分の一を削つた。

目次

[illegible]

毎年各々の巻を小冊子にすると、表紙裏にまねごとの序を記し、裏表紙の裏にはその年出会った美しい言葉を置いてしめくくりとした。この合冊本でもそれに倣うことにする。